水野弘元著『法句経の研究』
Gustav Roth ed., "Text of the Patna Dharmapada"

吉元信行

一

法句経は、佛教の倫理的教義を教え、佛道入門の指針ともなるべき佛陀の金言を詩に纏めて集録したものである。周知の如く、この経は、その原初的形態としては、あらゆる経典の中で最も古い部類に属するものである。そして、佛陀の真意を忠実に伝えた珠玉の詩として、大衆にも分かり易く説かれているため、あらゆる佛教徒が共通して親しみ伝持してきたものである。そのため、法句経は、その時代や地域に応じて、多くの異本や異訳を生み、あるいは、種々の経論に引用され、様々な様相を呈してきた。

これらの諸資料をすべて収集して、整理することは容易な業ではなかったが、この種の先駆的研究として、昭和43年に丹生実憲氏により『法句経の対照研究』(高野山・日本印度学会)が公にされ、学界に一つの光明をもたらすことになった。該書は、当時までに参見しうるあらゆる資料を駆使した対照研究により、法句経諸異本・異訳の経典史的体系づけをなし、さらに諸経論所引の法句経を調査整理したもので、今日まで他に類を見ない、この種の研究には不可欠の書として、学界を益してきた。

しかし、該書は、タイプ印刷でミスプリントも多く、また非売品であるため簡単に入手できない等の難点もあって不便であった。さらに内容的にも、その後に新らしい資料が出たり、また、プラークリット法句経の位置付けに誤解があるなどして、該書に代わる業績が待ち望まれていたのである。

此の度出版された水野弘元博士の労作になる『法句経の研究』〈以下「本書」と称す〉はその待望を見事に叶えてくれた良書である。本書は三十年にも及ぶ博士の法句経研究の蘊蓄を纏めたものである。本書では、「ウダーナと法句」という法句経研究の基本問題から始めて、従来の法句経についての研究を概観整理し、パーリ法句経〈Dhp〉を中心にして最新の成果をとり入れた諸異本・異訳の対照表を作成している。さらに、漢訳資料各個の研究を載せ、その成立と特質を論じ、それぞれの漢訳資料における偈文から、Dhp やウダーナヴァルガ〈Udv〉等における対応偈の検索ができるようになっている。

ところで、博士は、本書の校正の段階でN・S・シュクラ教授の校訂になる新資料 Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada〈BHSDhp〉を入手されたという。このテキストは、後述するように、在来の法句経とはまったく異なった系統に属するもので、従来の法句経研究の成果を覆すことにもなりかねないほど重要な資料であった。そこで、博士は、校正の段階で可

能な限り当該テキストを採用し、論稿に追加をしたり、対照表に繰り入れたりしている。しかも、このテキストに対しては、さっそく田端哲哉氏により総語索引が発表され（*Index to the Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada* (*N. S. Shukla edition*), compiled by Tetsuya Tabata, Kyoto: Abhidharma Research Institute, 1981）、さらに同氏によって詳細な書評がなされ（本誌33号）、また、本年度の日本印度学佛教学会学術大会においてとり上げられる（岩松浅夫「佛教梵語法句経雑考」昭56・8・26、第四部会、於名古屋・同朋学園、ほか）などして、たちまち学界に注目されるところとなった。

ところが、これと相前後して、ゲッチンゲンで、G・ロート博士が、BHSDhp と同一の写本の写真をもとにして、別に Patna Dharmapada と題して校訂発表された〈PDhp〉。これについては後に言及するが、当該テキストは概ね BHSDhp より精密な校訂であり、田端氏の指摘した如き Skukla edition の不備を幾分でも補い得るものである。

このようにして、本書の出版にこれらの新資料を加えることによって、今後の法句経研究に新しい展望が期待されるであろう。これらの中で、BHSDhp についてはすでに本誌前号に紹介されたので、小稿では、水野博士の『法句経の研究』とロート博士の PDhp について紹介することにしよう。

尚、PDhp のテキストは、小稿執筆中に入手したため、時間的余裕なく、管見した範囲での紹介に留め、詳細は他日を期すことにしたい。

二

まず、『法句経の研究』の内容について略述する。

第一章　ウダーナと法句　は、昭和28年、駒沢大学学報復刊第二号所載の同名の論文に若干の増補を加えたものである。この論文は、法句経研究の基礎とでも言うべきもので、北伝ウダーナ品 Udānavarga〈Udv〉と法句経の関係について、諸資料を駆使して論述したものである。発表当時としては、この種の研究の嚆矢ともなるべきもので、今日まで、法句経の研究者が先ず坐右にする定評ある論文であった。

ここでは、先ず、パーリ Udāna〈Ud〉では散文であるのに、Udv における該当部分が韻文となっていることから、Ud の方が原形に近く、後に Udv の方で偈頌の形に整理せられたとする（六頁）。

それから、『智度論』に、「如法句駡品中説」（大正25・二七八b、三二六a）とあり、そこに Dhp 象品及び Udv 馬品に相当する偈文が引かれていることから、博士は駡を馬の誤りと見て、ここには Udv が引かれており、それを「法句経」と称したと推測した。そして、博士は、「龍樹が法句経として引用しているのも、有部のウダーナ品ではなかったかと思われる」とし、さらに、「又有部にはこのウダーナ品以外に法句経なるものが伝えられなかった」と結論している（一四頁）。ところが、博士は、次章において、「大智度論が用いている法句経はパーリのものとも、説一切有部のものとも違ったものであったことが知

られる。しかし、もしウダーナ品を法句経とも呼んだとすれば、ウダーナ品に近いものであったともいえる」(四四頁)としているが、この記述と前章における記述とは矛盾する。このことに関して、筆者は以前、大乗のみならず有部においても Udv 以外の法句経が流布していた形跡のあることを指摘した(拙稿「Abhidharmadīpa における心・心所について」印佛研23―二、二一五～二一六頁、拙稿「アビダルマディーパ所引の法句経」宗教研究二四六、二四九～二五〇頁)が、このことからも、筆者は水野博士の後者の所説を支持したい。

漢訳『法句経』の原語が俗語形のものであったとの多くの証拠を提示されたのも博士の業績である。その代表的なものは、Dhp. 25 における dīpa 及び Udv. 4-5 における dvīpa に相当する訳語が、『法句経』では「錠明」となっていることである。パーリ語 dīpa には dīpa (灯明) と dvīpa (島) というサンスクリット化が考えられる。そこで、『法句経』における「錠明」なる訳語は、その原典がサンスクリットではなく、パーリ語等の俗語の形であったことを示すとするものである(二一～二二頁)。ちなみに、BHSDhp. 29 でも dīpa となっている。このような、佛典の梵語化以前の言語的歴史性についての反省は、同じ dīpa, dvīpa の問題を通じて、佐々木現順博士によって詳しく検討されたことである(佐々木現順『阿毘達磨思想研究』弘文堂、昭33、五九四～六〇三頁)。また、Dhp. 273 における dipadānaṃ (両足) を『法句経』では dipa-dānaṃ と見て、「灯施」と訳している例もある(立花俊道『法句経註解』三省堂・昭15・一五―一六頁参照)。

以上の様な種々の検討の結果、水野博士は、パーリ佛教では Ud と Dhp を別々に所持していたが、有部ではその両者を合わせ、更にニカーヤや Suttanipāta などからの偈文を集めて、Udv なるものを作ったと結論した。

第二章　法句経について　は、昭和47年、『佛教研究』誌上に発表した同名の論文に種々の増補を加えたものである。本章は、現存するあらゆる法句経関係資料を駆使した総合的研究となっている。先ず、法句 dhammapada の意味から始めて、経典史上における法句経の成立を論じる。そして、法句経は、十二分教や四阿含などの名称形成後に集録されたものであり、現存の経典や現在では散逸した未知の経典類から抜きとられたものであるという。

次に、現存分献に現われたり引かれたりしている法句経について概観する。Dhp や Udv 等の所属部派のはっきりしている数種の法句経のほか、漢訳経論に見える法句経についての言及も有益である。ここでは先ず、経部の論書と言われる『成実論』所引の法句経を調査して、経部は、有部の Udv とは異なった独自の法句経を伝えていたと推測しているのは注目される。

次に博士は、『智度論』所引の法句経に二例(大正25・二七八b、三一六a)あって、これらが Dhp とも Udv とも相違したものであることを指摘している(四三～四四頁)。しかし、『智度論』にはこれ以外にも「法句」なる文句が①巻一(五九c)、②巻五(九六c)、③巻五十七(四六四a)の三ヶ所にあることはす

でに先学の指摘するところである（三枝充悳「智度論に引用された諸経典について」印佛研1―二、三九〇頁、田端哲哉・書評「丹生実憲著法句経の対照研究」大谷学報49―一、八六頁）。このうち、②はDhp や Udv にも見出されず、③は、「法句」なる語のみで偈の引用はない。①について、博士は対照表には記入していながら（一五〇頁8行）、ここに問題にはしていない。このところは大正蔵経該当部分では長行になっていて目につきにくいところである。そこでは次の様に記されている。

如二法句中説一。神自能救レ神。他人安能救レ神。自行レ善智□。是最能自救。（大正25・五九c）

この引用のうち、□の部分が脱落していると見れば韻文になる。この偈について、ラモット師はDhp にも Udv にも見出せないとしているが、これは Dhp. 160 及び Udv. XXIII-11 に相当する。師は神を un esprit（霊魂）と訳している（Lamotte, É, *Le Traite de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*, Tome I, Louvain, 1944, p. 29）が、実はここにおける神は attan, ātman（自己）の訳語であった。また、この偈のcdに相当する部分が、『倶舎論』・『順正理論』・『アビダルマディーパ』〈ADV〉などにも引用されているので、次章対照表該当箇所（一五〇～一五一頁）に次の事項を追加したい〔順論2 p. 9c, 順正理論6 p. 360b, Kośa p. 27, Abhdīp p. 78〕。いずれにせよ、『大智度論』におけるこの偈は、Dhp とも Udv とも完全には一致しない。ところが『智度論』には、このほか、二十余ケ所にものぼるチベット訳 Udv に一致する偈の引用が見られる（丹生前掲書、七三二～七三四頁）ので、本論には、Udv 以外に、Dhp とも異なったある種の法句経が引用されたと推測されよう。

このほか、『十住毘婆沙論』・『坐禅三昧経』・『大乗涅槃経』などにおける法句経を検討し、それらが Udv とは同じでないが、それに近いものであるとする。そして、最後に『摂大乗論世親釈』所引の法句経に言及しているが、ここには実に驚くべき事実が見出される。周知の如く、『摂大乗論世親釈』には真諦・笈多・玄奘各訳が存在する。この世親釈各訳には、Dhp. 37, Udv. XXXVIII-55 に相当する偈が引用されているが、真諦訳のみが Dhp と一致し、他の二訳は Udv と一致するのである。このことから、博士は、「真諦訳はウダーナ品と違った法句経、または現存の梵文ウダーナ品と異なったウダーナ品から引いたものと思われる」（四六頁）と推測する。このことは、北伝佛教においても、当時、Udv とは異なった Dhp に近い形の法句経が流布していたことを意味する。このことについても、筆者はかつて ADV 所引の法句経に関連して指摘したことがある。すなわち、ADV 所引の法句経は、Dhp に近く、それに相当する『順正理論』の所引が Udv に近かったのである（拙稿「Abhidharmadīpaにおける心・心所について」印佛研23―二、二一五～二一六頁）。ADV と『順正理論』という、同じ正統有部に属する論書にも異なった法句経が引用されている。ちなみに BHSDhp 該当偈も、Dhp、摂論真諦訳、ADV と一致するのである。

次に、現存するあらゆる法句経諸本を(1) Dhp、(2)ガンダーラ

語法句経〈GDhp〉、(3)佛教梵語法句経、(4)漢訳法句経、(5)チベット語訳法句経の五類に分類して、それぞれをあらゆる資料を網羅して紹介している。そして、本章の最後には、本書校正の段階で入手したという BHSDhp についての追補が加えられているが、このテキストについては、すでに前号において紹介されたことでもあるので、後にPDhp を紹介するところでふれる程度にとどめたい。

なお、章末には、BHSDhp と Dhp., Udv との対照早見表がシュクラ博士による Concordance を基にして作成されている（六五～七一頁）ので便利である。

第三章　法句経対照表　は、同じく『佛教研究』第三～五号にかけて連載された論稿に若干の補訂をなしたものである。この種の研究の嚆矢は、勿論最初に触れた丹生氏の『法句経の対照研究』であるが、本書ではその欠点をカバーして、丹生氏の比定を修正したり、さらに多くの資料を加えるなどして、Dhp を中心にした対照表としては完璧に近いものとなっている。ただ、ここでは、あくまで Dhp を中心としたものであるから、Dhp に該当偈のない Udv の偈やチベット訳 Udv については丹生本を参見しなければならない。

また、本書では、『佛教研究』所載時にはとり入れられていなかった BHSDhp との対応が記されているので便利になった。さらに、全体の1/3ほどではあるが、『佛教研究』には余白となっていたところに新たに BHSDhp の相当偈の原文が記入されている。勿論、これらは校正の段階に入れたと思われるので、完全なものではないが、Dhp の偈をもとにして BHSDhp の相当偈が簡単に検索できるのでたいへん便利である。ただ、これらの記述は、PDhp との対応によって若干の修正を余儀なくされるであろう。ここで、今まで管見した範囲で、水野博士による Dhp と BHSDhp 対応偈の配当には次の様な修正が要求されよう。

Dhp.　50　[310]→cf. [310] (var. d)
　　70　[386]→[389]
　　74　[179], [180]→[179+180ab]
　　75　[180], [181]→[180cd+181]
　　87　add. [263]
　　92　[87]→[87ab+270cd+87cd]
　　97　add. [333]
　　164　[314]→cf. [314] (var. e, f)
　　169　[225]→[224], cf [225] (var. c)
　　182　[334]→cf. [334]
　　200　[257]→cf. [257] (var. c, d)
　　234　add. cf. [282]
　　236　[162]→cf. [162] (var. a, b)
　　259　add. [32]
　　274　[360]→cf. [360] (var. e, f)
　　275　[360], [359]→[360ef+359ab]
　　276　[359]→cf. [359] (var. a, b)
　　277　[374]→[373], cf. [374] (var. a)

278 [373]→cf. [373] (var. a), [374] (var. a)
295 [47]→cf. [47] (var. c)
314 [100], [101]→[100ab+101ab]
316 [169]→cf. [169] (var. c, d)
317 [169]→cf. [169] (var. a, b)
327 add. [24]
343 [149]→cf. [149] (var. cd)
375 add. [63+64ab]
376 [64]→cf. [64] (var. ab)
379 add. [324]
381 [59]→cf. [59] b.
392 [35], 36→[36ab+35cd]
393 [37]→cf. [37] (var. cd)

(本表の作成は本学大学院博士課程大窪祐宣氏の協力による)

第四章　漢訳法句経の翻訳成立について　は、昭和54年に同じ『佛教研究』第八号に発表されたものである。ここでは、漢訳『法句経』翻訳の経過や本経に誤訳の多い理由、そして、五百偈の Dhp が七五七偈の『法句経』になった理由などが明解に論究されている。

その要点は、以下の如くである。紀元二二四年、印度人維祇難が五百偈の法句経俗語原本を将来した。当時俗語は難解であったので、後に将来された九百偈本(Udv)と七百偈本とによって補正して七五七偈の『法句経』が成立した。この補正の段階で五百偈以外に Udv の偈が混入した、と。

このことを証拠づけるものとして、次に『法句経』と Dhp 及び Udv の関係を対比して表が付せられている(二七〇～二九八頁)。それらの作業によって、博士は、『法句経』の偈が七五八偈であるという従来の通説をくつ返し、七五七偈であるとしているのは傾聴に値しよう。そして、本経が、五百偈本を基礎にして、七百偈本と九百偈本より偈を採用した例を、本経の中に二つ以上の対応偈の見つかることによって跡づけている。

第五章　漢訳法句譬喩経について　は、昭和55年、『佛教研究』第九号に掲載されたものである。先ず、大正蔵経第四巻所収の本経における偈の順序に錯雑混乱のあることを指摘して、諸本によってその順序を修正している(三四三～三四七頁)。次に、本経の成立について、博士は、「ある系統の法句譬喩経の原本があって、漢訳法句経の中から任意の偈を選び、その偈を訳出した譬喩経と結び付けた」(三四九頁)という説を支持する。また、本経の中にある七十五の因縁物語のうち、歴史的事実や地域的な面で実際に合致しない誤った記述があったり、まったく訳者の創作と思われる記述のあることが指摘されて興味深い。

第六章　出曜経の研究　は、序にも記されているとおり、まったく書き下ろしの新稿である。『出曜経』は Udv の注釈書に相当する。ここでも博士は、『法句譬喩経』と同様に、大正蔵経第四巻所収のものの順序に混乱があるとて、それを修正している(三六二～三七五頁)。

この『出曜経』は、法救の撰になる Udv を注釈説明したものであるが、その説明の中に Udv 以外の偈が混入しているか

ら、その類別が困難であった。ここで博士は、独自の方法でUdv以外の偈を抽出して（三七〇頁）、さらにその典拠の追跡までしている。

次に本経の抄経である別生経七十五種について論じ、その別生経が本経のどの部分からの別出であるかを調査している（三七五頁以下）。また、本経はUdvの全偈を注釈したものではないから、本経にあげられないUdvの偈もあるわけであるが、博士は、本経の中から本来のの偈を復元するために、諸訳と対比して綿密な調査をして、それを表にしている（三九三頁以下）。

そのほか、本章では、『出曜経』の中に偈の形をしていないが、明らかにUdvからの訳と見られる偈の散在しているところを発見し、二・三それを復元しているのは興味深い（四七〇～四七一頁）。また、同一偈の重出や本経独特の偈をあげて検討をしており、『出曜経』に関するこれほど綿密な研究は他に類を見ないであろう。

第七章　法集要頌経の研究　は、本書出版のあと、本年の『佛教研究』第十号にも掲載された。『法集要頌経』は、Udvの漢訳であり、特に『出曜経』を参照して、多くの訳官の協力により完成したものである。しかし、Udvの原文から見た場合、多くの誤訳があって、数々の混乱を来たしていることが指摘されている。このことにより、本経の訳者が梵本を見ずに、漢訳の異訳諸本をもとにして本経を作ったのではないかと推測されている（四八一～四八二頁）。

次に、本経の偈について検討し、その約八割は『出曜経』を参照して訳されているとする。そして、本経の中にUdv以外のもの――例えば『出曜経』の注釈部分――から引いた偈などを抽出し、さらにUdvの偈を梵・蔵・漢対照して、それらについての詳細な検討を加える。その作業から、博士は、本経が「もし梵本に従って訳出したものであるとすれば、梵本の理解力が十分でなかったと断ぜざるを得ない」（四九六頁）と断言し、その具体的実例まで示している。そして、さらに、本経において、『出曜経』の訳をより改悪して、原文とまったく違ったものになった例までも紹介する（五一三頁）。

ところで、本経に対するこのような原典批判的態度に対して、C・ウィルメン教授の様に、本経が「中国語のテキストであり、中国語自身の語法によって読まれ理解されている」とし、さらに、「印度のテキストは第二次的資料として使用されるものであって、唯一真実とみなすべきでない」（Willemen, C.「The Chinese Udānavarga―大窪氏の書評に答える―」佛教学セミナー33、八九頁）との立場もある。水野博士の立場は、明らかにこれと相違しているが、筆者も、経典史的に法句経を研究しようとする場合、印度の資料を第一次的資料とする原典批判の立場が必要であろうと思う。本誌上に交された *The Chinese Udānavarga* をめぐる大窪氏とWillemen教授の論争（大窪祐宣・書評「The Chinese Udānavarga」佛教学セミナー31、七六～八五頁及び前掲Willemen論文）も、法句経を経典史として批判的に扱うか、あるいは中国語の古典文学として扱うかの立場の相違に起因していると思われる。

三

以上、本書の論述に従って、筆者の興味の趣くままにその概略を紹介した。いずれの論稿を読んでも、水野博士の綿密さと客観性がにじみ出ており、諸本諸訳の詳細な対照研究によって、漢訳の原典批判にまで及んだ博士の熱意とその方法論にはただ敬服するのみである。

ただ、本書では、丹生氏が『法句経の対照研究』で試みた如き、法句経の原初的形態や法句経原本の成立とその系統についての考察（丹生本六一二―六二二頁）は詳しくなされていない。原語的に見て、大まかに、「パーリのものがもっとも古く、ガンダーラ語のものがこれに次ぎ、ウダーナ品のはもっとも新しいものと考えられる」（五二頁）とするくらいである。此の度、BHSDhp（PDhp）という今までにない新らしい系統の法句経が提供された現在、改めて、これら諸資料を言語的にそして思想的に検討することによって、法句経の原初的形態やその発展の様相をより鮮明にすることも可能となろう。

ところで、筆者は以前、この様な観点から法句経諸異本が、ある思想や教義展開の諸相を反映する鏡になっていることに注目して、原始佛教における六随念や十随念の成立過程を論じたことがあった（拙稿「十随念の成立過程」佛教学セミナー11、四五～四八頁）。十随念の項目は、佛・法・僧・戒・施・天に対する随念(anussati)、死念、身念(kāyagatāsati)、入出息念及び寂静随念である。拙稿において、筆者は、Dhp. 296-301 に説かれた佛念（Buddhagatāsati）、法念、僧念、身念及び不害・修習の二楽意に注目して、これらの項目が基本となって、十随念が成立したことを論じた。その証拠として、法句経の諸本諸訳に様々な随念の相が説かれており、経典史の成果をもとにして、法句経諸本諸訳の上にその思想展開の跡をたどることができたのである。

このような観点から新資料 BHSDhp（PDhp）を見ると、我々は驚くべき事実に遭遇する。そこでは、身念と二楽意のみ説かれていて（No. 241-243）、Dhp における如き佛念・法念・僧念に関する偈が見出されないのである。ところが、BHSDhp における念身の直後に次の様な偈がある（No. 244）。

ye jhāna-prasutā dīrā nekkhaṃmôpaśame rata/
devā pi tesaṃ pihayanti saṃbuddhānāṃ satīmatāṃ//
（PDhp. p. 119 により一部修正）

念ある等覚者たちは
禅定に専注せる賢者であり
世間から離れた静けさを楽しむ
神々も彼らを羨むほどに

この偈に相当する Dhp. 181 はこれとほぼ一致するが、Udv. XXI-9 では、satīmatāṃ に相当する句が śrīmatāṃ（śrīmat 幸ある）となっている。このことは、あるプラークリットが BHSDhp 及び Dhp では satimat となり、Udv では śrīmat にサンスクリット化されたことを意味する。

筆者は、この saṃbuddhānaṃ satīmatāṃ が、その直前の

偈 (BHSDhp. 243) における kāyagatāsati (身念) と結びついて、buddhagatāsati(佛念) なる概念を生み、それがさらにdhammagatāsati (法念) と sanghagatāsati (僧念) なる概念を生んで、Dhp. 296–298 の偈が成立したと理解したい。随念の原語は普通 anussati であるのに、Dhp や GDhp にのみ佛・法・僧に対する随念を意味する場合にも -gatāsati (-kada svadi) なる用語の使われているのは、その形跡であると思われる。そうすれば、BHSDhp は教義史的に見ても、今まで、現存資料の中では最も古い原初的法句経をもとにしていると考えられていたDhp より、更に古いテキストに基いたものであると言えよう。

このことはまた、法句経諸本に示された法印の名数を調べることによっても判明するであろう。法印の教義史的展開については、すでに袴谷憲昭氏によって詳細な考察がなされ、その名数による体系化も論じられている(袴谷憲昭「法印覚え書」駒沢大学佛教学部研究紀要37、六〇—八一頁)。それによると、一応思想的に、法印の項目が、無常・無我→無常・苦・無我→無常・苦・空・無我(これらに涅槃寂静の加わる場合もある)というように増加発展していったと考えられる。そこで、各資料に説かれた法印の項目を比較すると次の如くである。

BHSDhp. 373–374	無常・無我	
Dhp. 277–279	無常・苦・無我	
GDhp. 106–108	無常・苦・無我	
Udv. XII-5–8	無常・苦・空・無我	
『法句経』	非常(無常)・苦・空・非身(無我)	
『出曜経』・『法集要頌経』	右に同じ	

ここにおいても、BHSDhp における項目が最も原初的様相を呈しており、他の資料については、先学指摘のとおりの経典史上の展開が跡づけられるであろう。この様な方法論がさらに多くの偈についても試みられるならば、法句経諸本の原初的形態やその系統・年代などについて従来の不明の点がより鮮明になるのではなかろうか。

四

ここで、始めに一言した如く、G・ロート博士の校訂になる **Patna Dharmapada** 〈PDhp〉について簡単に紹介したい。このテキストは、博士による左記の論文において、Supplement (付録) として付けられているものである。

ROTH, GUSTAV. "Particular Features of the Language of the Ārya-Mahāsāṃghika-Lokottaravādins and their Importance for Early Buddhist Tradition," *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung, The Language of the Earliest Buddhist Tradition* (*Symposien zur Buddhismusforschung, II*) Herausgegeben von Heinz Bechert. (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-Historische Klasse Dritte Folge, Nr. 117) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980. pp. 78–135.

テキスト及びノートは、該稿の九七〜一三五頁に載せられている。

ロート博士と言えば、Tibetan Sanskrit Works Series Vol. XII の Bhikṣuṇī Vinaya の校訂者としても知られている。博士は一九一六年ドイツに生まれ、Friedrich (Breslau) 大学及び Leipzig 大学に学び、Muenchen 大学において、ジャイナに関する論文で Ph. D. を取得した。その直後から一九五六年まで Patna 大学において古代インド史と文化の講座に属して研究を続け、一九五九年より Gottingen 大学のインド学科で教鞭をとってきた。その間にも博士は Patna を第二の故郷として再三訪れている。Bhikṣuṇī Vinaya や PDhp の校訂は、この様な経過を通じて完成されたのである。

管見したところによれば、当該テキストの校訂は BHSDhp (Shukla ed.) よりは、概ね厳密であり、資料として使用するのに充分信頼しうるようである。すでに田端氏によって指摘された如く(前掲書評) BHSDhp にはミスプリントが多く、氏は前掲 Index の Corrigenda において Shukla ed. の修正を行っているが、二〜三の例外を除いて、田端氏の訂正の正しいことがこのテキストによって確められた。

ただ、PDhpでは、同じ写本を使用していながら、BHSDhp と偈の配当が異なっている場合がある。例えば、BHSDhp. 24ab の偈が、PDhp では 23ef となっており、以下26偈までその配当がずれている。また、BHSDhp. 193ef が PDhp では 194ab となっている。さらに PDhp. 120 では、BHSDhp. 120a に相当する句が欠落している。この様な例はその他にも多く見受けられるが、この三例からすれば、諸本と対照したり、前後の偈と対比してみると、Shukla ed. の配当の方が当を得ているように思われる。

また、両テキストの校訂を対照してみると、多くの不一致点が見つかる。例えば、両テキストの第一章 Jama-varggaḥ における全十三偈のみの不一致点を指摘すると次の如くである。

verse No.		BHSDhp.	PDhp.
1	a	pūrvaṃgamā	pūrvvaṃgamā
	b	śreṣṭhā	śreṣṭhā
	c	anveti*	anneti
2	a	[pūrvaṃ]	[pūrvvaṃ]
	b	manojavā	manodbhavā
	c	anveti*	anneti
	d	chāya	cchāyā
3	b	pāpaka[mmobhayaḥ]-ttha	pāpa-kamme[udhayaḥ]-ttha
	c	vihanyati*	vihaṃnyati
4	b	katapuñño	kata-puṃño
7	c	amāttaṃñuṃ	amāttaṃñū
	f	dubbalaṃ	durbbalaṃ
8	c	mā[ttaṃñuṃ]	mā[ttraṃñū]
	e	taṃ	tam
	f	parvataṃ	parvvataṃ
9	a	sapraṃñaṃ	sa praṃñaṃ
	c	pariśra[yāṃi]	pariśra[vāṃi]

	d	tenāttamano	tenātta-mano
10	a	saprañhaṃ	sa praṃñaṃ
	d	care	ccare
11	b	vibhīyatā(?)	bitīyatā
12	b	ativattati	abhivattati
	d	kalapakkhe	kāla-pakkhe
13	a	mohāḥ	mohā
	b	nātivati	nābhivattati
	c	yaśśo	yaśo

＊はBHSDhp における註記に PDhp と同じ読み方をしているところ。

この中で、BHSDhp. 1b と 12b とは明らかなミスプリントである。そのほかの例は、両博士の校訂に対する立場の相違によって起った問題と思われ、いずれが正しいかは多方面に亘る詳細な検討を要するであろう。この相違の多くは書写上の癖に関わる相違と思われるが、その中でも 2b, 9d, 11b, 12b, 13b の相違は重要である。そのうち、PDhp. 9d tenātta-mano は、Udv. XIV-13 では tenâptamanā となっており、パーリ語でも attamana は一語であるから（田端哲哉「Dhammapada の偈文について」印佛研18―一、一四五頁参照）、BHSDhp の方が正しいと思われる。両テキストにおけるこのような相違点は全編に亘って調べれば無数にあるであろうから、両校訂のどちらをとるかは今後の重要な問題点になるであろう。ただ、我々が研究の資料として用いる場合、ミスプリントが少なく、校訂が厳密であるという点で、PDhp の方を一応主テキストとするほかない。

しかし、PDhp にも問題のある箇所があるので、今後法句経の研究は、両テキストを並用することによって更に充実するであろう。ちなみに、当テキストの偈に相当する諸資料における相当偈の配当が、BHSDhp では付録の Parallels に、PDhp では各偈の直後に指摘されているが、ここでも両博士の意見の相違が認められる。しかし、これについても、両者の配当をあわせて、さらに、丹生・水野両著の業績を参見することによって、完璧なものとなろう。尚、BHSDhp における Parallels に対しては、田端氏によってパーリの資料を中心にした補追がなされている（前掲 Tabata's Index, Corrigenda pp. II～III）ので、参見されたい。

ところで、シュクラ博士は BHSDhp の序文においても、このテキストの成立年代や所属部派について何ら言及していないが、ロート博士は PDhp についての Notes とその主論文 "Particular Feature of the Language of the Ārya-Mahāsāṃghika-Lokottaravādins" において、このテキストは、説出世部の所属であり、Dhp より更に古いプラークリット・パーリの版に基いたものであると結論しているのは注目すべきである。ロート博士によると、現存する資料で、現在までに説出世部のものとされているテキストには次のものがある。

㈠ Mahāvastu Avadāna

㈡ バーミヤン出土律蔵断片

㈢ Sikṣāsamaccaya 所収の比丘雑誦律

㈣ Abhisamācārikā

㈥ 比丘戒本
Bhikṣnī Vinaya

博士は、佛陀当時の言語である古マガダ語から始めて、部派佛教で用いられた言語及び聖典に使用された言語に言及している。この博士の所論のうち、当該テキストに関係するところのみを要約する。

佛教では、ジャイナ教が古マガダ語のみを使用したように、ある種の言語を特にひいきするというようなことはなかった。そのため、佛教の伝播につれて、その言語は地域的に時代的に次第に変容していった。その中で、説出世部は、紀元前三〇〇年頃、大衆部より内部分裂して成立した。アショカ王の後、佛教では古マガダ語が衰退し、西方や南方に伝播するにつれて、次第に西方語の影響を受けるようになった。すでに、紀元前一世紀の碑文には、古マガダ語系の形跡はなく、今日のパーリ語に近いプラークリット語が使用されている。このような傾向は、右にあげた説出世部の律蔵にも見えている。さらにこの中に、当時の社会状況から、サンスクリットの影響も受け始めた。このようにして、紀元前二世紀から紀元二世紀にかけて、プラークリットとサンスクリットの融合した言語が用いられるようになった。この頃の説出世部の文献やその活動の中心地であったマトゥラー出土の碑文には、このような傾向が強くあらわれている。これらの文献の中には、サンスクリット的環境を土台にして、その中にプラークリットの形が散在しているのである。

右にあげた説出世部に属する六種の資料のうち、㈣〜㈥の写真は、PDhp とともにパトナの Bihar Research Society に保管されており、ともに十二世紀頃に書写されたものである。その中のビナヤテキストである㈣と㈥の中には法句経の偈が含まれており、それは説出世部の法句経から引かれているようである。また、『マハーヴァストゥ』には二十四偈を含む法句経 Sahasravarga の全偈が引用されているが、それに該当する偈が、Dhp には16偈、GDhp に17偈あるのに、この PDhp には22偈もある。PDhp は他のサンクリトヤーヤナ・コレクションと同様に Proto-Bengali 文字で書写されており、その書体としては説出世部のテキストの範囲に含まれている。

右にあげた六種の説出世部に属するとされるテキストが、サンスクリットあるいはプラークリットの形の散在したサンスクリットで書かれているのに対して、PDhp はその言語の特徴が、他のテキストよりプラークリット的で均質的である。ここに、我々は、説出世部の他のテキストとは異なって、中期インドの言語の特徴であるプラークリットのテキストにサンスクリットの外套を着けた今までにないテキストの研究をすることになる。

以上博士の所論の一部を要約したが、ここで、我々は、同じロート博士の校訂であり、同じく説出世部のテキストであると比定された Bhikṣuṇī Vinaya と PDhp を比べてみると、前者の原語はサンスクリットに近く、後者のそれはパーリに近いという大きな相違点を見出す。しかし、このような矛盾点も、博士の所論を読むと解消される。すなわち博士は、説出世部が成立したとされる紀元前三百年頃から、これらのテキストが書写

されるまでに千年以上の年月が経過していることを指摘する。説出世部と言えば、上座部系の説一切有部と同様に、成立以来長い命脈を保ち、インドに佛教が滅亡するまで存続した大衆部系の有力な部派であった。その間に、聖典に使用した言語は当然変遷を余儀なくされたであろう。このような観点からすれば、他のテキストよりさらにプラークリット的色彩の濃厚なこのPDhpは、説出世部の歴史においても、かなり古い時代に属するものと思われる。該稿では、説出世部資料についてさらに詳細な言語学的あるいは地誌学的考察がなされているが、ここでは紹介は省略したい。

ただ、このような詳細な検討の結果、博士は、説出世部と上座部とは、ともにごく初期の佛教に用いられた術語を使用したと結論している。そうすれば、ここに与えられたPDhpの言語がパーリ語に近いプラークリットであることは頷けることになる。

さらに博士は、該稿のSupplement: 1. Notes on the Patna Dharmapadaにおいて、特にPDhpの原典的特色について論ずる。そして、このテキストにおける名詞の格変化、動詞形、-kkhaという形、歯音などについての特徴を種々あげる。その結果、PDhpは現存するDhpよりもっと古いプラークリットの偈文に基いているとし、さらに、PDhpの直接の源泉資料としては、現存のDhpをまったく考慮せず、偈文やその次第にも相違があると結論している。

五

このようにして、PDhpのソースが、Dhpのそれよりも更に古いということは、今日の学界で未解決のままになっている原初的法句経の実像を追跡する上において、今まで以上に有力な資料を得たことになる。このようなプラークリット的混淆梵語の法句経を原典批判的に研究することによって、更に大きな学的成果を期待したい。

以上紹介してきたように、水野博士の『法句経の研究』は、従来の法句経研究の総集成として、また、ロート博士の校訂になるPDhpは、この法句経研究に未来への新らしい展望をもたらすものとして、今後の学界を益すること計り知れないものがあろう。ここに紹介した二編の法句経に関する研究とテキストとを、最近相次いで発表された法句経に関する輝かしい金字塔として、ここに両博士の偉業を讃え、広く読者諸兄に推薦する次第である。

（水野弘元『法句経の研究』昭和五六年二月　春秋社　A5判　五一五頁　索引二四頁　八,〇〇〇円、Roth, G. ed. "Text of the Patna Dharmapada" *Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, Philologische-Historische Klasse·Dritte Forge, Nr. 117. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980, pp. 97–135, 16.5×24cm, 193 pp. DM. 66)

追記　去る十月十七日、花園大学において行われた第三十二回仏教史学会学術大会において、並川孝氏はBHSDhpとPDHPとを対照して両校訂の不備を指摘し、本資料再校訂の必要性を提言された（並川孝「新資料ダルマパダについて」東洋部会口頭発表）。